没後80周年記念特集

大村の偉人

石井 筆子

知的障がい児教育に生涯を捧げた

●歴史資料館☎48・5050

［1861～1944］肥前国大村生まれ
知的障がい児教育の父といわれる石井亮一とともに「滝乃川学園」を運営し、近代の知的障がい児教育に尽力

❹静修女学校教職員・生徒

❶幼少期の筆子と祖母たち

❻天使のピアノ（滝乃川学園）

❺小鹿島果

❷クララ・ホイットニー

❸津田梅子

現在の滝乃川学園
（石井亮一・筆子記念館）

写真から紐解く 筆子の一生

❶筆子は、大村藩士の渡辺清と妻・ゲンの長女として生まれました。幼いころから手厚い教育を受け、外国の書物などに触れながら成長し、上京すると間もなく官立東京女学校に入学。外国語や西洋の事情などを学びました。

❷後に勝海舟の息子と結婚したクララ・ホイットニーとは、ホイットニー家の塾で出会いました。筆子はクララによって、女性観などに大きな影響を受けます。その後、筆子は19歳でヨーロッパへ留学します。

❸❹帰国後、津田梅子らとともに政府が設置した華族女学校の教師となりました。後に静修女学校の校長に就任するなど、日本の女子教育のために貢献しました。

❺留学後に結婚した小鹿島果との間に3人の子が生まれましたが、長女・幸子には知的障がいがありました。障がい者への理解が乏しかった時代、社会から向けられる偏見に、筆子は失意の底に沈みます。また、次女と三女は幼くして亡くなってしまい、果もまた、35歳の若さで肺結核のため亡くなりました。

❻筆子の父・清または叔父・昇から結婚のお祝いに贈られたと

特別番組を放送予定

1月下旬におおむらケーブルテレビで石井筆子をテーマとした特別番組を放送します。
YouTube市公式チャンネルでも配信予定です。
●広報戦略課（内線204）
▶YouTube

まんが おおむら人物伝 石井筆子

販売を行います。
この機会にぜひお買い求めください。

書籍情報　令和3年刊行、B6判、モノクロ・カラー、ソフトカバー
価格　1,000円（税込）
販売場所　歴史資料館

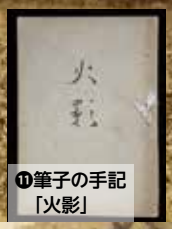
年表

1861	肥前大村城下（現・大村市玖島）で生まれる
1872	父・渡辺清（男爵）の上京により筆子も上京
1873	官立東京女学校へ入学
1874	父・渡辺清は福岡へ。筆子は東京に残る
1877	ホイットニー家の英語塾でクララと出会う
1879	第18代アメリカ大統領グラントと長崎で会見
1880	ヨーロッパへ留学
1882	留学から帰国
1884	小鹿島果と結婚
1885	津田梅子らと、華族女学校のフランス語教師に
1886	長女・幸子が生まれる
1888	大日本婦人教育会の発会式で演説
1890	次女・恵子が出産後半年で死去
1891	三女・康子が生まれる 濃尾大地震が発生 石井亮一が孤女学院を設立
1892	夫・果死去
1893	静修女学校の校長に就任
1896	九条節子（のちの大正天皇皇后）にフランス語を教える
1897	孤女学院が滝乃川学園に改称
1898	三女・康子死去 アメリカ・デンバーで津田梅子とともに演説
1900	津田梅子が女子英学塾（現・津田塾大学）を開設
1903	石井亮一と結婚
1906	滝乃川学園を巣鴨に移転
1916	長女・幸子死去
1920	滝乃川学園で火災が発生
1921	渋沢栄一が第3代学園理事長に
1923	関東大震災が発生
1928	学園を現在の国立市に移転
1932	筆子、脳いっ血で倒れる
1937	夫・亮一死去。学園長に就任
1944	筆子、死去

❼石井亮一と筆子

❽滝乃川学園遠景（滝野川村時代）

⓬渋沢栄一



⓫筆子の手記「火影」

❾室外遊戯の様子

⓭晩年の筆子と学園職員

❿学芸会の様子

｜画像提供｜❶❷❹❺❼❽❾❿⓫⓭ 滝乃川学園
❸⓬国立国会図書館「近代日本人の肖像」www.ndl.go.jp/portrait/

される天使のピアノ。今も滝乃川学園に現存しています。

❼❽❾❿**石井亮一**は、濃尾大地震で人身売買の標的となる被災地の少女を救うため、「聖三一弧女学院」を創設。その後、孤女学院に「白痴教育部」を設置し、「滝乃川学園」と改称。日本初の知的障がい児の教育施設が誕生しました。果と死別した筆子は、亮一と出会い結婚し、知的障がい児教育・福祉へ尽力する道を歩み始めます。

⓫⓬1920年に滝乃川学園で火災が発生し、園児6人が亡くなりました。学園の閉鎖を検討するも、**皇后陛下**の励ましで再建を決意。翌年、**渋沢栄一**が第3代学園理事長に就任しました。筆子は、亮一と二人三脚で滝乃川学園の経営を行い、幾多の困難を乗り越えていきました。

⓭1932年、脳いっ血で倒れた筆子は半身不随となり、車いすの生活になりました。さらに、1937年に学園を維持するために莫大な借金を抱えたまま、夫・亮一が死去。学園長に就任した筆子は、困難に挫折しそうになりながらも何度も立ち上がり、社会的弱者とされてきた人たちの教育と尊厳を確保するため、人生を捧げ続けました。1944年1月24日、筆子は学園の職員、保母数人に見守られるなか、静かにその生涯を終えました。